

Title	ジヨルジュ・ サンドと自然科学：妖精の国の物語『祝杯』を中心に
Sub Title	George Sand et les sciences naturelles : autour de La Coupe, nouvelle qui se déroule au pays des fées
Author	西尾, 治子(Nishio, Haruko)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2017
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.64 (2017. 3) ,p.59- 83
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20170331-0059

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ジョルジュ・サンドと自然科学

——妖精の国の物語『祝杯』を中心に——

西 尾 治 子

はじめに

サンドは、『夢想者の物語』に顕著にみられるようにプラトンの精神主義に傾倒していた。科学か魂か、理想主義か科学主義か、この問題に対しサンドはどのように対峙したのか。本稿では、作家の書簡、自伝的創作『我が生涯の記』、妖精の王女の生と死の物語『祝杯』、仕事をもつ女性芸術家を描いた『アンドレ』、後年の『祖母の物語』など科学の問題を扱った作品とそこで言及されている輪廻説やピエール・ルルーの哲学思想なども参照しつつ、科学者との実際の交流も含め、サンドがどのように自然科学を尊重し、人類の未来を志向する理想主義をヒロインに擬人化させているかを考察する¹⁾。

まず、実生活で押し花や蝶の採集にも情熱を傾けたサンドと自然や科学との結びつきを概観したあと、同時代の博物学者ジョフロワ・サンチレール、さらにダーウィンの『種の起源』とサンドの科学思想との関連性を明らかにする。次いで、一種の科学小説『アンドレ』およびプラトンとピエール・ル

1) 本稿は2016年10月20日～22日にフランス中部のブルジュで開催された国際ジョルジュ・サンド学会（テーマ：ジョルジュ・サンドと自然科学 *George Sand et les sciences de la Vie et de la Terre*）において10月21日の第二セッションでおこなったフランス語の拙口頭発表「*L'âme ou la science? ce que représente le choix de la reine dans La Coupe de George Sand*」を推敲し手直しを加えたものである。

ルーの多大な影響が認められる中編小説『祝杯』を取り上げ、科学、哲学およびジェンダーの視点からテキストの読みの可能性を探る。

18世紀に比較解剖学の発達により女性特有の身体器官が発見されると、古代ギリシャ以来、長く信じられてきたアリストテレスに代表される「ワンセックス・モデル論」は「ツーセックス・モデル論」へと変容し、科学分野におけるジェンダー観は女性蔑視の傾向を強めていった。

ジョルジュ・サンドのほとんどの作品は、女性が決して男性に劣る「ツーセックス・モデル」でも「第二の性」でもなく、往々にして男性より優れた知性と人間性を有している、いわば「第三の性」²⁾であることを、多種多様な文学的戦略を駆使し徹底して提示している。死を間近にした伴侶のアレクサンドル・マンソーのために書いた中編小説『祝杯』の「読み」を通し、二項対立が支配する「出口なし」の「表徴の帝国」³⁾で人類の未来を見据え、第三の道を示唆する女性作家ジョルジュ・サンドの現代性についても考察を試みる。

I. ジョルジュ・サンドと自然科学

まず、サンドの実生活における科学との関連性について俯瞰してみよう。

2) 「第三の性」について：フロベールからサンドに宛てた1868年9月19日付の手紙。「Quelle idée avez-vous donc des femmes, ô vous qui êtes du Troisième sexe ?」(Flaubert, *Correspondance Flaubert-Sand*, Alphon Jacobs, 1982, p196.)。このジェンダーの混乱についてのサンドの見解は「性はひとつしか存在しない」というものであった：« il n'y a qu'un sexe » (1867年1月15日のフロベール宛の手紙)。フロベールの言う「第三の性」は、男性性も女性性も同時に併せもつ両性具有を示すメトニミー（換喩）であり、サンドの「性はひとつのみ」という表現は両性具有的というより「男でも女でもない性」、すなわち、意識の内側から階層的な二項対立を崩し脱構築するエクリチュールを目指すジェンダーのあり方と捉えうる。換言すれば、フロベールはリアリズムに顕著なメトニミーを、サンドはロマン主義や象徴主義の特質であるメタファーを作家のアイデンティティとしている。

3) 参照：『メデューサの笑い』松本伊瑛子、国領苑子、藤倉恵子編訳、紀伊国屋書店、1993年。

サンドと自然科学との結びつきは非常に強く、彼女の幼少の頃に遡る。サンドは4才で父親を落馬事故で亡くすが、父親の元家庭教師であったデシャルトルがそのまま城館に住み続けており、彼は幼いオロールに植物や昆虫や星座について教え、ラテン語を含む男子教育を受け、解剖学にも関心をもたせた。

幼なじみの植物学者ジュール・ネロー Jules Néraud (1795–1855) も植物に関する専門的な知識をオロールに伝授した。サンドはマダガスカルやレユニオン島(かつてのブルボン島)を旅し、島の動植物に明るい彼に「マルガッシュ」というあだ名をつけ、『ある旅人の手紙』の中で彼について特別な扱いをしている⁴⁾。また、サンドの長女ソランジュの父親と推定されるラ・シャートルの貴族の息子アジャンソン・ドゥ・グランサーニュも博学の士であり、好奇心旺盛な若いサンドに解剖学や骨学の知識を与えた⁵⁾。

このようにサンドを取り巻く人間たちから授かった科学知識に加え、サンド自身、読書を通して先人たちから多くの知識を培ったと思われる。サンドが所有していた蔵書カタログの全1200冊のうち、相当数の250冊が科学に関連する書物であったことが確認されているからである。

精神と物質を二元論的に捉える存在論とは異なる世界全体を表象するモナド論を提唱したライプニッツ⁶⁾や「人間球体説」や「洞窟の比喩」で知られるプラトンの影響は大きく、さらにサンドが自らを「ルソーの娘」と語り、

4) Cf. *La Revue des Deux Mondes* (4e lettre, le 1er juin 1836). Jules Néraud (1795–1855), 植物学者／マダガスカルやレユニオン島の動植物に詳しい。著書に *Botanique de ma fille*, Hetzel, 1866. 1855年5月9日、ジュール・ネローがイタリアで亡くなったことを知った日、恋人マンソーは、サンドを慰めるために花の絵を描いて贈っている。Cf. Barbara Domopoulou “Le monde des végétaux chez Sand et Michelet” in *Fleurs et jardins, op.cit.*, p.273.

5) Georges Lubin, *Album Sand*, Éditions Gallimard, 1973, pp.33–34.

6) ゴットフリート・ヴィルヘルム・ライプニッツ Gottfried Wilhelm Leibniz (1646–1716) ドイツの哲学者、数学者。Cf. ライプニッツ『モナドロロジー形而上学叙説』清水富雄・竹田篤司・飯塚勝久訳、中央公論新社、2005年、酒井潔『ライプニッツ』清水書院〈人と思想〉2008年、『思想 no.930 創刊80周年記念号：ライプニッツ』岩波書店、2001年。

その哲学をモーツァルトの音楽に例え敬愛していたジャン・ジャック・ルソーが植物に造詣が深かったことも周知の通りである。サンドの科学へのアプローチの仕方は、珍しい植物の名前を知る、押し花にする、絵画に描く、小説化するといった実践から哲学、文学的なものに至るまで多彩だった。ショパンをロバに乗せ散策に出て自然に親しんだり、恋人マンソーがサンドのために購入したガルジレスのこじんまりとした瀟洒な家の周りで蝶々の収集をし、息子モーリスと昆虫標本を作るなど、具体的に自然と密接に関わる経験も積んでいる。サンドはさらに、自分が作家になった頃は骨相学 *phrénologie* が流行し始めていたが、どちらかといえば人相学 *physionomie* の方に興味があったとも書き残している。

このように幼い頃から伝達された知識や自ら読書により獲得した科学知識は、のちに彼女の創作の助けとなって機能することになる。とりわけ 19 世紀に生きた女性作家の場合、無知と対極に位置する知や知識は、階級差、性差、身分差、あるいは教育差を解消する戦略として大きな役割を果たした。では、サンドは作家となってから、どのような科学理論に関心を抱いたのだろうか。交流のあった科学者はいたのだろうか、科学をテーマとする彼女の創作にはどのようなものがあるのか。次にこれらの疑問点について探ってみたい。

II. ジョルジュ・サンドと科学者たち

II. 1. 科学とジェンダー：ツーセックス・モデル論の落とし穴

すでに紀元前 3500 年頃に古代エジプトで解剖がおこなわれていたことが示すように、「人間とは何か」という命題は歴史を超えて人類が抱いた関心の的であったと思われる⁷⁾。古代からアリストテレスに代表される人間観で

7) 日本の歴史における最初の人体解剖は、雄略天皇の命によって行われた稚足姫皇女の法医解剖とされる。『日本書紀』第十四巻参照。その後、701年に成立した大宝律令では解剖の禁止が明文化されたと言われているが、原文は残存していないため詳細は不明である。その後、江戸時代には盛んに解剖がおこなわれるようになった。石出猛史「江戸幕府による腑分の禁制」『千葉医学雑

ある「ワンセックス・モデル論」が信じられていた。それは、男性の性のモデルのみに注目し、男は完全な人間、女は不完全な存在と考える人間観であった。ところが18世紀後半から19世紀にかけて比較解剖学が発達し、女性の身体に男性と異なる身体器官が発見されると、科学の分野におけるジェンダー観は「ワンセックス・モデル論」から「ツーセックス・モデル論」へと変容する⁸⁾。その結果、男性にはない子宮や女性性器に独自の名称が付けられた。ところが、トマス・ラカーの『「セックスの発明」—性差の観念史と解剖学のアポリア』が指摘するように、「ツーセックス・モデル論」は、女性という異なる性を尊重するどころか、かえって男性中心主義を増長させ、女性たちを依然として下位のハビトスの住人として閉じ込め序列化化してしまう逆戻り現象を引き起こした。

サンドが敬愛したルソーも例外ではなかった。彼は、『エミール』に読み取られるように「男性、女性ともそれぞれの性において完全であり、その完全性において互いに補い合う関係」であるとする「性補完論」を提唱し、女性には女性専用の教育を、男性には男性専用の教育が必要だと主張した。ルソーの「性補完論」は科学者が提唱していた「ツーセックス・モデル論」に依拠していたのである。さらに、17、18世紀は女性サロンの隆盛期で男性文学者、哲学者、政治家、芸術家、建築家が著名な女性サロン通いをしたことは周知の通りだが、モリエールとルソーは、サロンを営む女性や才女を酷評している。その意味で、ルソーはアンチフェミニスト的な側面があった。ルソーの不平等な女子教育観や性補完論に対し、哲学者を信奉するサンドは正面切った批判はしていないが、次の引用文は、暗にルソーのようなアンチフェミニストの男性を糾弾するサンドのジェンダー思想を如実に示してい

誌』第84巻第5号、千葉医学会、2008年、221–224頁。

8) 解剖学の発見の落とし穴：「ワンセックス・モデル論」から「ツーセックス・モデル論」への移行は、女性蔑視を促進する結果を招いた。参照：ロンダ・シービンガー『科学史から消された女性たち』小川真理子・藤岡伸子・家田貴子訳、工作舎、1992年。トマス・ラカー『セックスの発明』—性差の観念史と解剖学のアポリア』高井宏子・細谷等訳、新栄堂、1998年。

ると言えるだろう。

われわれは確信している。本当に強い男性、つまり根っからの善人で賢い男性は女性の知的な解放を望んでいるということ。女性の解放を懼れるのは弱い男性であり、自分たちの優越性を確認するためには憲兵を必要とし、その助けがなければ奴隷以下の状態に落ちてしまうような男たちなのだと思う。(…) おそらく、科学、芸術や哲学の分野が女性にも解放される時代が訪れるだろう。(…) 女性たちの能力に疑念が挟まれるようなことがあったとしても、女性はしっかりした方向性が与えられさえすれば、彼女たちに認められるのは優れた能力ばかりであると確信をもって云えるのである。⁹⁾

このほか、ルソーの性善説とは相容れない「人間は生まれたときは善でも悪でもない」という言説（『モープラ』）や『メルラン夫人の回想記』『マルシーの手紙』その他多くの作品の中で、サンドは「女性にも男性と同じ知的教育を与えるべきだ」と男女平等教育の必要性を強調している。トマス・ラカーの科学とジェンダーに関する研究『セックスの発明』—性差の観念史と解剖学のアポリア』が出版されたのは21世紀直前のことであり、19世紀の作家であるサンドは「ツーセックス・モデル論」を知る由もないが、上記の引用が示すように、サンドは時代を先取りしたジェンダーの視点をもっていたという事実は、作家サンドの現代性という観点から注目に値するだろう。

次に、サンドの1835年の作品『アンドレ』と科学者エチエンヌ・ジョフロワ・サンチレールとの関連性について考察を試みたい。

II. 2. 『アンドレ』¹⁰⁾ (1835) とエチエンヌ・ジョフロワ・サンチレール 女性を男性を補完する二義的な存在ではないと考えるサンドは、科学理論

9) George Sand, « Mémoires de Madame Merlin », *Questions d'Art et de Littérature, des femmes*, 1991, p83.

10) George Sand, *André*, Editions de l'Aurore, Meylan, 1987.

において、異なる種に関し、違いや隔たりを強調し二項対立的に論理を進める「永遠に同一的な」システムや典型には批判的であった。サンドがその講義に出席したことがあるにもかかわらず、キュヴィエ¹¹⁾よりエチエンヌ・ジョフロワ・サンチレール¹²⁾に接近したのは、当然の成り行きだったといえよう。サンチレールは、二項対立型の同一不変型プランを志向するより、むしろ、動物は同じ構造をもっている「折り紙」のようなもので多彩に変化するという説を称揚していたからである。サンチレルの「動物=折り紙」説は、動物の多様化をそのダイナミックスにおいてとらえていた。Martine Watrelotによれば、サンドとサンチレールは、1835年から1839年の間、実際に会ったり、書簡を交換しあった事実が認められる¹³⁾。

サンドとサンチレールが知り合った1835年は、『アンドレ』というサン

11) Baron Georges Léopold Chrétien Frédéric Dagobert Cuvier (1769–1832) フランスの博物学者。比較解剖学 *Anatomie comparée*、古生物学 *Paléontologie* の研究など。教会側の思想の持ち主。

12) Étienne Geoffroy Saint-Hilaire (1772–1884)。博物学者。解剖学者。啓蒙思想の博物学者ビュフォンの監督下にあった国立自然史博物館の教授を務めた。1793年にパリ植物園付属の動物園 *Ménagerie* を創設、奇形学 *Tératologie* に偉大な功績を残した。1830年に「カーンのワニ論争」でキュヴィエと対立。「キュヴィエ・ジョフロワ論争」については、ジル・ドゥルーズとフェリックス・ガタリが『千のプラトー』(*Mille plateaux*, 宇野邦一ほか訳、河出書房新社、1994)で詳説している。参考：異なる文化のあいだの「違い」や「隔たり」を強調するタイプのキュヴィエに対し、異なる文化のあいだにそれでも「基本構造」を見定めようとするタイプのサンチレール(動物=折り紙説)は、進化に関しお互いに対立する概念を有していた。<http://www.geocities.jp/mqytp272/cuisine080404.html> : 「比較文化A 料理の比較解剖学 第1講 (2004年4月8日)」筆者参照、2016年8月25日。イジドル・ジョフロワ・サンチレール(1805–1861)は、彼の息子で奇形学 *Tératologie* における偉大な功績とされる *Histoire générale et particulière des anomalies de l'organisation chez l'homme et les animaux* を著した。

13) Cf. Martine Watrelot, « Lettres d'Étienne Geoffroy Saint Hilaire à George Sand », 国際ジョルジュ・サンド学会 *George Sand et les sciences de la Vie et de la Terre* (2016年10月20日–22日、ブルジュ)における10月20日第一セッションの口頭発表。

下の小説が出版された年でもあった。

この小説の主要登場人物は、タイトルと同名の主人公アンドレとヒロインのジュヌヴィエーヴの若者二人である。物語世界では、植物学に詳しいアンドレには科学の専門知識が、帽子や洋服につける装飾用の造花作りを職業とするジュヌヴィエーヴには芸術上の知識が具現化されている。学識豊かで芸術的な才能ある作中人物たちを登場させ、恋する青年が恋人のヒロインに科学の知識を伝授するというプロットを駆使することにより、小説世界に19世紀の科学知識を取り込むことに成功しているフィクションである。この小説を高く評価したのが、ジョフロワ・サンチレルだった。

『アンドレ』に着目したサンチレルとサンドの交流は五年間に渡り続いたが、Martine Watrelotの研究によれば、この間にサンドはエチエンヌに16通の手紙を書いている¹⁴⁾。他方、サンチレルは、ゲーテ¹⁵⁾を尊敬し、自分を高く評価してくれるドイツの作家に深く感謝していた。ゲーテは、色彩について個人的に研究し、科学にも多大な関心を抱き、ダーウィンの「進化論」に似た考えを持っていたとされる。サンチレルは、今度は隣国の作家ではなく、当時、自国のベストセラー作家であり、科学の知識に言及している『アンドレ』を書いたサンドに着目し、彼女の小説の中で自分の科学理論を紹介して欲しいと依頼したのだった¹⁶⁾。サンドはこれに応じ、1838年の終

14) ジョルジュ・リュバン監修のサンド『書簡集』全26巻に収録されているのは、そのうちの2通のみである。その他のサンド直筆の手紙は、パリ市立歴史図書館に保存されている。

15) ゲーテ(1749-1832)は、動植物、天気、光と色などの研究に取り組み、新たな発見をした。植物研究では、50年後に発表されたダーウィンの「進化論」に似た考えを持っていた。しかし「感覚」に頼る考察だったため科学者として認められることはなかった。現在、彼の『色彩論』(光と闇の境界線にこそ「色」は存在する：光と闇の境界の部分にだけあざやかに色が並ぶとする理論)は、「色彩心理学」や「知覚心理学」の先がけと考えられている。参照：『ゲーテ 色彩論』木村直司訳、ちくま学芸文庫、2001年。

16) 1830年8月2日、ゲーテはエッカーマンに「今や、ジョフロワ・サンチレルは(…)明確に私たちの側に立っている。このことは私にとって信じがたいほどの価値を持っている」と彼を高く評価した。

わりに「*Soi pour soi. La science*」を執筆した。この草稿は1839年版の長編小説『レリア』に挿入される予定だったが、この計画は実現されることはなかった¹⁷⁾。この頃になると、サンドは実際的な科学そのものよりピエール・ルルーの哲学思想に深い関心を抱くようになり、サンチレルも健康を理由に公の場から次第に退いてゆき、こうして作家と科学者の関係は疎遠になっていった。

『アンドレ』は、「家庭の中の天使」が理想の女性の典型とされていた時代に、職業をもって自活する女性が描かれている点でジェンダーの視点からも重要な作品である。ヒロインのジュヌヴィエーヴは、Geneviève Fleuristeと張り紙を出した「自分だけの部屋」で、恋人アンドレから得た知識を職業技術に活かし、女性の帽子や洋服につける装飾品を制作し、この製品を売って生計を立てている。自立し仕事に生きるヒロインは、ヴァージニア・ウルフが指摘する「女性が小説を書こうとするなら、お金と自分自身の部屋を持たねばならない」とする女性作家のメタファーであると云えよう¹⁸⁾。ジュヌヴィエーヴは、社会規範が許容範囲内とする運命、すなわち、19世紀前半の「グリゼット」と呼ばれる女性たちの運命を引き受けない。「グリゼット」は、庶民階層出身の16才以上30才未満の若い娘たちで、親元を離れて自立し、貧しく健気で、自分と同様、社会的地位を持たない学生を恋人にする娘である。ところが、ジュヌヴィエーヴは身分違いの城主の御曹司と恋に落ちるため、「グリゼット」ではなく、「ロレット」という範疇にカテゴリー化される娘である¹⁹⁾。当時の社会規範は「グリゼット」は許容するが、

17) サンドが執筆した「*Soi pour soi. La science*」は、サンドがサンチレルの比較解剖学の法則を理解していたことを証拠づけている。草稿はPierre Reboulにより1960年に編纂された。先述したプールジュ国際学会におけるMartine Watrelotの口頭発表「*Lettres d'Étienne Geoffroy Saint-Hilaire à George Sand*」を参照。

18) ヴァージニア・ウルフ『自分だけの部屋』川本静子訳、みすず書房、1999年、p.4。

19) グリゼットおよびロレットに関しては以下を参照：小倉孝誠「グリゼットの栄光と悲惨」『藝文研究』91号、慶應義塾大学藝文学会、2006年、pp.1-19。

「ロレット」を激しく拒絶する。高岡によれば、「道徳規範が支配する構造に組み込まれない「ひとり暮らしの女」が生きるのは、貧困の支配する領域、乱れたセクシュアリティと秩序を脅かす自立、および「危険な不服従の世界」であり、アンドレと身分違いの恋をするだけでなく、結婚をし子どもまで宿してしまうのは「危険な行為」に他ならない²⁰⁾。世間の偏見は、社会通念から逸脱した女、つまり身分違いの結婚をし金持ちになる下層階級の女ジュヌヴィエーヴを決して許さないからだ。「逸脱した女の物語」である『アンドレ』は、恋人と結婚し妊娠したにもかかわらず、死産とヒロインの死という悲劇で終わる。性格が優柔不断で父親の財産に依存して生きるアンドレが、明らかにヒロインより人間性において劣る「去勢された存在」として描かれている点も注目に値する作品である。

では、サンドの科学への関心は、サンチレルとの交流が途絶えて以降、消滅してしまったのだろうか。次にサンドとダーウィンの関係についてみてゆくことにしたい。

Ⅱ. 3. サンドはダーウィン²¹⁾の進化論を肯定したか

18世紀半ば以降、多くの学者が人類の起源を知りたいと考え、自然科学に関心を持つようになっていた。「進化論」に関しては、英国ではダーウィンの『種の起源』が登場する70年も前に「引き裂きハンター」と呼ばれるジョン・ハンター（1728–1793）が墓から掘り起こさせた夥しい数の遺体を解剖し、ヒトは猿（半分ヒトで半分が動物）から黒人そして白人へと進化したとする説を唱え、キリスト教会全盛時代の「人間は6日間で作られた神の創造物説」を真っ向から否定していた。他方、フランスでは『無脊椎動物

20) 高岡尚子「ジョルジュ・サンド『アンドレ』を読む：フェミニズム批評・ジェンダー批評から」『研究教育年報』第4号、奈良女子大学文学部、pp. 23–33。

21) Charles Robert Darwin (1809–1882)：自然選択説、突然変異説（進化論）を提唱。同種の個体の間でも生存に有利な形質をもつ個体が子孫を残し、その積み重ねで進化が起きるとした。

の体系』(1801年)でキュヴィエの天変地異説を批判したラマルク²²⁾が進化論「用不用説」を提唱し、次いでケプラーとコペルニクスの地動説にも匹敵する革命的発見と言われたダーウィンの『種の起源』が1859年に出版され、大きな反響を呼んでいた²³⁾。

世の中の動きを追い同時代の風潮を小説化し人々を啓蒙することにより、よりよい社会を構築することが作家の使命と考えていたサンドも、この科学振興の動きに敏感だったと思われる。ベルナール・アモンによれば、1840年代にドイツ学者フンボルトの「環境が人類の進化に及ぼす影響」について書かれた『自然の総覧表』*Tableau de la nature*を読んでいたサンドは、ダーウィンの『種の起源』が出版されるとこれを読み、息子のモーリスにも読ませている²⁴⁾。しかし『種の起源』は存在論的な観点からみた場合、全面的に同調するには一抹の不安を残す理論でもあった。とくに、一方は変異し生存し続けるというのに、他方は環境変化に適応できない事態は、あり得てよいことなのだろうかという倫理上の問題が残る。サンドは1868年に、ダー

22) Jean Baptiste Pierre Antoine de Monet, Chevalier Lamarck (1744–1829) : 彼の進化論は一般に「用不用説」(使用する率の高いものが進化し、使われないものは退化する)と呼ばれる。人類はその起源から変化しないとする生物不変論のビュフォンやスエーデンのリネの説を支持するキュヴィエは、ラマルクの進化論に強く反対した。他方、ダーウィンは『種の起源』第三巻で彼をこの分野のバイオニアと高く評価している。ラマルクは、「生物学」(biologie)という用語を作り脊椎動物と無脊椎動物を初めて区別したことで知られる。

23) サンドとダーウィンに関する先行研究としては、Bernard Hamonの研究論文「自然が消えてゆく今だからこそ、考えようではないか」およびBarbara Dompoulouの「サンドとミシュレにおける植物界」が挙げられる。いずれも『サンドの作品における花と庭園』と題する共同研究書の中で、それぞれ、自然科学史とサンド、あるいは歴史家ミシュレとサンドといったテーマをもとに作家と科学者について言及している。さらに、2016年10月にフランスで開催されたジョルジュ・サンド国際コロックでFrançoise Genevrayがサンドとダーウィンの関係について発表をおこなうと予告していた。

24) Bernard Hamon, « Car il est temps d'y songer, la nature s'an va... », *op.cit.*, p.288.

ウィンの理論に言及しつつ、自然と人間との関係が悪化している現状を嘆き、次のように書いている。

日ごとに自然の領分が減少し、見当外れの開墾に荒らされて自然が作った庭園が絶えず削りとられていく様子を目にするにつけ、私はダーウィンを信じる人々等ともにこう結論づける。人間は偉大な創造者であり、自分たちの審美眼と叡智を活用し、地球を最大限によりよいものに変えてゆくべきであると。私が今、不安に思うのは、人間が恐ろしい破壊者であり、自然を素晴らしいものにしたというより台無しにしてしまっているということである。改良したつもりが幾多の大失態を演じ、冒瀆的なおこないをするといった事態を引き起こしていることだ。人の心や魂のためというより私腹を肥やすために人間はあくせくしており、最も役立つはずの植物や動物たちが醜悪そのものと化し、あれほど褒めそやされて改良されたはずのものが、多くの場合、悪化しひどい状態になってしまっている。²⁵⁾

フロベールに宛てた手紙に「われわれは自然から生まれてきて、自然の中で、自然により、自然のために存在する」と書き送るほど自然を何よりも大切なものとするサンドは、科学の進歩により人間は自然を破壊してしまっているのではないかと懸念するのである²⁶⁾。しかし、サンドは、1868年6月に刊行された『両世界評論』誌の上記の文節に続き、ダーウィンの進化論そのものについて「それでもなお、ダーウィンの理論は真実味があるし、論理的には正しい」と全面的に肯定している²⁷⁾。とはいえ、彼の理論を曲解して

25) G.Sand, « Lettres d'un voyageur à propos de botanique », *La Revue des Deux Mondes*, 1er juin 1868, p.580.

26) « Nous sommes de la nature, dans la nature, par la nature et pour la nature. », *Correspondance*, t. XXIV, à G.Flaubert, 6 juillet 1874.

27) « La théorie de Darwin n'en est pas moins vraisemblable et logiquement vraie » (下線筆者) 注 23 参照。

「人間が作ったものではないものを何でも無条件で破壊してよいと結論づけ
てはならない」と釘をさしている。なぜならば「そのように解釈することは、
この理論を矮小化してしまうだろうし、その本来の目的から逸れてしまうこ
とになるからだ」と述べ、科学が人間の叡智をもって正しく利用されるべき
だと強調している²⁸⁾。

当時の作家や知識人の多くは『種の起源』の理論をさまざまに解釈し、イ
ギリス産業の資本主義をマルサス主義的に正当化しているとする批判がある
一方、「自然選択説」を自由放任主義の弱肉強食の資本主義、人種差別、戦
争、植民地主義と帝国主義などのイデオロギーに利用する者もいた。

では、なぜサンドは「真実味があり、論理的に正しい」と『種の起源』を
肯定的に捉えたのだろうか。『種の起源』の英語の原典を詳しく調査した関
(山村)の論文「C・ダーウィンの自然観—『種の起源』における「闘争
(Struggle)」と分岐の原理から—」によれば、ダーウィンは「メタファーと
物語的な方法なしに自然について語ることをしない科学者」であった。さら
に、本書には科学用語としては失格の「生存競争」という語を「隠喩として
用いる」とわざわざ但し書きが付されているという。つまり、ダーウィンは、
科学の書物にありがちな自然に関する科学オンリーの専門的な説明モデルで
はなく、科学的な知識を超えた意味を生成する解釈モデルである彼自身の自
然観そのものを駆使し、科学理論を物語風に表現しており、『種の起源』は
「無限に複雑な関係の中で生きている生物の姿に関するダーウィン独自のメ
タファーとなっている」のである²⁹⁾。換言すれば、ダーウィンの科学理論は
サンドにも理解しやすいように書かれていたのだ。翻ってみれば、サンドが

28) « mais elle ne doit pas conclure à la destruction systématique de tout ce qui n'est pas l'ouvrage de l'homme. L'interpréter ainsi diminuerait son importance et dénaturerait son but ? », G.Sand, « Lettres d'un voyageur à propos de botanique ». (下線筆者)注23参照。

29) 関(山村)陽子「C・ダーウィンの自然観—『種の起源』における「闘争
(Struggle)」と分岐の原理から—」東洋大学『「エコ・フィロソフィ」研究』
Vol.6、2011。https://www.toyo.ac.jp/uploaded/attachment/8460.pdf#search=
'ダーウィンと人口論' 2016年8月31日、筆者参照。

サンチレルから距離を置くようになったのは、あまりにも専門用語ばかりの説明が理解困難だったからでもあった。さらに、ダーウィンは当時の大多数の科学者と同様に女性は能力が劣ると考えてはいたが、一般的な差別主義は共有せず『ビーグル号航海記』が明かしているように奴隷制に反対していたこと、教育が重要だと考えていたことなど、ダーウィンには平和主義を標榜し、社会主義的で自由主義的な側面があったが、作家サンドにとってこれらのポジティブな面がダーウィンを肯定する要素として説得力をもって働きかけたのではないかと推測される。

ダーウィンは71歳の時に『植物の運動力』³⁰⁾を出版し、植物が動かぬものと考えられていた時代にあらゆる植物のすべての部分が生長しているかぎり運動していることを明らかにした。植物の生長生理学の古典といわれるこの本に書かれている理論は、サンドがノアンでドラクロワと交わした植物の生態や押し花に関する議論やダーウィンの植物研究書の三年前にサンドが出版した『花たちのおしゃべり』³¹⁾の中心的テーマに通底していることを付記しておこう。

Ⅲ. 『祝杯』——サンドの哲学思想

先述したように、サンドにとって『種の起源』は素晴らしい科学の発見だったが、存在論的な観点から問題を残すものでもあった。とくに、一方は変異し生存し続けるというのに、他方は環境変化に適応できないまま種が途絶えてしまうとする理論は、倫理上、あり得てよいことなのだろうか。換言すれば、何事も科学優先で心や魂の問題は見捨ててしまってもよいのか、という問題である。

魂か肉体か、換言すれば、イデアリスムスかマテリアリスムスかという問題は、19世紀の人々にとって重要な哲学的テーゼであった。というのは、その頃、科学哲学分野では大きな刷新が起こり、それまで同一のカテゴリーに入れられていた哲学と科学が袂を分かつことになったからである。

30) C. ダーウィン『植物の運動力』渡辺仁 訳、森北出版、2012年。

31) ジョルジュ・サンド『花たちのおしゃべり』樋口仁枝訳、悠書館、2008年。

19世紀はカバニスの精神と肉体の関係論とともに始まったとさえ言われるように、フランスには科学主義を強く支持する多くの知識人が出現した。シャルル・ド・レミュエザが、「カバニスにおいては、胃が食物を消化するように脳が思想を消化する。かくして思想は分泌する」と記したように、カバニスの科学主義の勢いにはすさまじいものがあった³²⁾。言い換えれば、19世紀は科学と信仰、唯心論的精神主義と物質主義的マテリアリスムスのイデオロギーの対立と葛藤の世紀だったのである。

ロマン主義者は霊的なものを化身としてあるいは感覚として理解し、実証主義者は現象を関係性の総体として捉えて伝統的な形而上学を拒絶、改革派は継続的な世界観を力強く推進し、精神であろうと物質であろうと、存在の永劫的な基盤を構成するとみなされる本質の不動性に反発した。こうした思潮の中、フランスの博物学者かつ数学者でもあり、数学の確率論に微分や積分の概念を導入したことで知られるビュフォン（1707-1788）もまたマテリアリスムの立場を取っており、アカデミーの評価は低かったものの、一般の読者に多大な影響力を及ぼしていた。

この科学万能主義のマテリアリスムスの風潮に対抗し、イデアリスムスの重要性を強調したのが、サンドに近いピエール・ルルーであり、ポール・ジャネやジャン・レノーであった。折しも、『プラトン全集』の仏語訳全13巻（1825-1840）がギリシャ語に堪能であった哲学者ヴィクトル・クザンの翻訳により出版され、科学主義の猛威に対しプラトン哲学が唯心論の旗手となって抵抗していた³³⁾。

32) Pierre = Jean = Georges Cabanis (1757-1808): « son cerveau digère les pensées comme l'estomac digère les aliments, et opère ainsi la sécrétion de la pensée ». Cf. Yves Pouliquen, *un idéologue: De Mirabeau à Bonaparte*, Odile Jacob, 2013. <http://www.cosmovisions.com/Cabanis.htm>, consulté le 29 août, 2016.

33) フロベールが恋人の詩人ルイズ・コレに「君は理想が好き」なのだから、哲学者の翻訳によるプラトンを読むように」と助言し、姪のカロリーヌ（愛称ルル）への手紙でプラトンの『饗宴』と『フェードル』を読むよう勧めたのは、まさにこのクザンの翻訳版であった。

この知識人界を席卷する問題に作家サンドが答えを与えていると思われる作品が、1865年に出版された『祝杯 *La Coupe*』である³⁴⁾。

『祝杯』は、傍らで15年間も秘書役を努めてくれていた恋人アレクサンドル・マンソーのために、サンドが1865年の春に書き降ろした作品で、マンソーは当時結核に罹り余命いくばくもない状態にあった。この中編小説には科学を優先する唯物論マテリアリスムスか魂を重視する唯心論スピリチュアリズムをとるべきかの選択に揺れる妖精の女王が描かれている。マテリアリスムスを象徴する妖精の世界と死後に永遠の魂は残るスピリチュアリズムの人間界が対立している。妖精の世界では人種や階層の差異は認められないものの、上位の位置を独占しているのは圧倒的に強く美しい女で、彼女が国を治めている。

妖精の女王は若く彼女が杯を干したその日のように美しかった。というのも薬草の杯を飲み干すことにより永遠の生命を得た妖精たちは、老いることも若返ることもなく、その決定的瞬間のままの状態でいたからだった。こうして、若い妖精は相変わらず血気盛んで、熟年層は真面目か愁い気味で、高齢層は、老衰しているか悲し気であった。女王は妖精の中で、もっとも背が高く澁刺としていて、最強で、最高に美しく、やさしく、そして賢かった。女王は最も物知りで、不死の薬草を発見したのも他ならぬ彼女であった。³⁵⁾

サンドは、妖精たちを不死身の生を生きる存在として描いている。人間を筆頭とする「地上の物はすべて死すべき運命にある」のに対し、妖精たちは永遠の運命を生き、地球が消滅しない限り死ぬことはない。「時間の深淵の中で世代が移り変わるのを見てきた妖精にとっては、一人の人間の命など、

34) 1865年3月末、サンドは中編小説『妖精の死 *La Mort des fées*』の執筆にとりかかった。4月に完成した物語は、題名が『ラ・クーブ』に変更されていた。

George Sand, *La Coupe*, Paris, Michel Lévy, 1865, p.81.

35) George Sand, *La Coupe*, Michel Lévy, 1876, pp.8-9.

ちっほけなものに過ぎない」³⁶⁾のである。その代わり、彼女たちはエネルギーの節約のために、一切の感情をもたない存在として描かれている。魂の永劫を否定するマテリアリスムスが支配する妖精の世界では、人間と違い、妖精達には感情というものが無い。彼女達には内面的なもの、魂が欠けているのである。したがって、人間は死んだ後にも魂が残るが、妖精達には死後に残る物は何も無い。

他方、人間は唯心論の世界に生きるものとされており、恋愛をはじめ人間らしい感情をもって生きることが出来、死後に永遠の魂は残るものの、物質としての身体的生命は一定の年月の末に必ず終焉を迎える。

『祝杯』は、氷河の穴に落ちこちて妖精に助けられた王子エルマンと王子を捜して妖精の世界に迷い込んでしまう家庭教師のボニユス先生、感情のない冷たい妖精界より永遠の魂をもつことのできる人間界に惹かれる妖精の女王、成長し人間の妻を娶り子供まで作りながら妖精の世界に住み続けるエルマン、妖精でありながら王女と同様に賢い妖精であるがゆえに人間を理解しエルマンに恋してしまうズィラ、人間たちに自らの国が領域侵犯されることを恐れる妖精たちの激しい論争と反乱、国の争乱の責任を感じる王女、といったプロットにより妖精界と人間界の二項対立関係を際立たせつつ、物語を進行させる。王子エルマンを見失ったかどで王に処刑される運命が待っている人間の王国より、妖精の国にとどまりケーキ作りや家事にいそむ人生に最大の喜びを見出すボニユス先生は、いわば「さかさまのジェンダートラブル」を象徴しており、その様子を語り手はユーモアを籠めて語っている。ボニユス先生の女装はあらゆる人間界の偏見を剥ぎ取り、事物に新たな光を与えている点で、物語世界内で一種の異化作用の役割を果たしている。

IV. 死後の世界：輪廻説

先述したように、サンドは科学主義を否定していた訳ではなく、友人のルイ・ヴィアルドに、まだその目的に達してはいないが「科学は真実へとつな

36) *Ibid.*, p.81.

がる道であるのは確かです」と書簡に書き送っている³⁷⁾。フランスは19世紀に入ってもまだ「人間は神が創造した」とする宗教的コンセンサスが世の中を席卷していたが、世紀半ば過ぎにダーウィンの『種の起源』(1857)が翻訳出版されると、イギリスに続きフランスの知識人の間でも科学が哲学にかわって次第にもてはやされ、称揚されるようになっていた。

このように人間界の科学偏重主義が支配する状況の中、『祝杯』の妖精の王女は、妖精の谷間で「ランプが消えるように死んでいった」年老いた家庭教師ボニユス先生の死にゆく様をみて人間の死が静謐なものであると知る。そして、妖精の世界に訪れる決定的な永遠の死を恐れ、人間のような「真実の魂の永劫」を望んで、ついに地上の命と引き換えに死の杯を仰ぐ決心をする。つまり、彼女は、妖精界のマテリアリスムではなく人間界が象徴するイデアリスムを選択するのである。

次の引用場面は、人間の死と妖精の死の相違を明確にしている重要なシーンである。ズィラと王女は死について次のように語り合っている。

「人間は肉体的には死にますが、魂は死ぬ事はありません。かれらこそ不死身なのではないですか？永遠という深淵のなかでは、われわれこそ一時的な存在にすぎないのではないのでしょうか。」王女は次のように答えた。「そうなのです、ズィラ。われわれはそのことを杯を飲み干したときから知っていたのです」。³⁸⁾

ここで王女が述べている「われわれが杯を飲み干したとき」というのは、妖精達が永遠の命を得るために、一斉に特別の薬草入りの杯を仰いだときのことを意味している。妖精の世界では、妖精達は杯を仰いだ時の年齢のまま永遠に生き続けるという仕組みになっている。妖精の世界には少女から高齢者まであらゆる年代の妖精が存在するのは、そのためである。氷の岩に身を

37) 1868年6月10日、サンドからルイ・ヴィアルドへの手紙。George Sand, *Correspondance*, t. XXI, p.12.

38) *La Coupe*, *op.cit.*, p.59.

もたげた妖精の王女はズィラに次のような遺言を残し、ソクラテスのように毒杯を仰ぎ、たったひとり孤独の裡に死んでゆく。

貴女はエルマンに教えてね。彼にまずこの科学（知識）においては人間がわれわれ妖精を超えるよう努力する事、なぜなら、人間はお互いに助け合い永遠に競争しなくてはならないからです。（…）叡智により人間は殺人を犯すことはなくなるでしょう。科学の進歩により病は追放されることでしょう。³⁹⁾

ここには、自らの死後もなお、人類の未来に心を配る妖精の女王の人徳を通して、科学の進歩とその有益な使用を期待する作者の願望が透けてみえる。つまり、サンドは、妖精の王女の言説や生き方を媒介に、科学も魂も、イデアリスムスもマテアリアリスムの双方とも人間世界にとって必要であると強調している。

ところで、物語世界でサンドが最後に行き着き、その重要性を強調するのは、愛の問題である。一般にサンドの小説世界で語られる愛とは、多様な重層性をもつ、異性愛、同性愛、親子愛、師弟愛、人類愛などの複合的かつ普遍的な愛なのであるが、この愛がなければ科学も哲学も意義がないと主張する。『祝杯』における愛の問題は、妖精に育てられたエルマンの言葉を、語り手が述べる次の場面に集約されている。

エルマンは妖精の王国で欠けていたものに気づいた。彼は可愛がられ、教育を与えられた。守られ、良い物をたくさん与えられた。しかし、彼は愛されていなかった。そのために彼は誰をも愛することができなかった。⁴⁰⁾

エルマンに人間の愛を教えたのは、彼の犬だった。氷河の穴に落下するエ

39) *Ibid.*, pp.104–105.

40) *Ibid.*, p.50.

ルマンを口に加えて必死に守り助けた犬の方が、妖精たちが知らない真実の愛を知っていた。「忠実な動物は、時折、彼に「愛しているよ」と言っているかのように思われた。エルマンは、なぜかわけもなく、泣いた」と語り手は述べる。サンドの動植物に対する愛情は、ペット愛といった現代風の家族的な動物愛とは同一ではない。というのは、サンドの動物愛は彼女が信じる輪廻転生説を文脈としているからであり、それが動植物への作家のこだわりや愛を構成する最大の特徴となっているからである。動植物は自分が死んだ後に生まれ変わる生物かもしれないのである。

V. 輪廻転生説と死

サンドが晩年に書いた一連の童話の中には、プラトン哲学やピエール・ルルーの哲学思想に依拠するサンド独特の「輪廻転生説」が垣間見られる。『犬と聖なる花』（1875）に登場するウイリアムさんは、かつての自分の前身はビルマの蒸し暑い雨期を生きた白い象であり、そこでは「聖なる花」と呼ばれていたと話す⁴¹⁾。また、『花たちのおしゃべり』の中のルシアンさんは、石、チョウチョ、フレンチブルドッグ等の動物の前身を経て、現在は人間のルシアン Lechien さんになっていると告白する。ルシアンさんはさらに、前世では「白いうさぎ」や「白い馬」と呼ばれてうれしかったことを憶えているが、死ぬ時の事は憶えていないとまで言うのである⁴²⁾。

アニー・カムニッシュによれば、輪廻説にはメタモルフォーズ *métamorphose* とメタンブシコーズ *métempsychose* の二種類がある。前者は死後の魂が同じ生命体に宿り、後者では魂は人間のみならず、その他、幾多の鉱石や動植物にも宿る。ルシアンさんの話が如実に物語っているように、サンドの場合は、前者の同じ生命体に魂が宿るメタモルフォーズではなく、後者のメタンブシコーズの輪廻説を踏襲している⁴³⁾。

41) George Sand, *Contes d'une grand-mère*, II, Glénat, 1995, p.71-108.

42) ジョルジュ・サンド『花たちのおしゃべり』樋口仁枝訳、悠書館、2008年、p.110-136。

43) Cf. Annie Cameniche, “Une croyante spiritualiste : George SAND”, in *Les*

前世が犬であったというルシアンさんの突飛に思われる発想は、しかしサンドにとっては決して物珍しい考え方ではなかった。というのは「私には風変わりな兄がいて「僕は前世では犬だったんだ」とよく言っていました。私は自分が植物だったと思います。」とサンドはフロベール宛の手紙に書き残しているからである⁴⁴⁾。サンドが風変わりな兄と言っているのは、父モーリスと小間使いとの間に生まれた腹違いの兄の Hipolyte Chatiron のことである。サンドのこの手紙は、『ボヴァリー夫人』の作者が「自分はファラオンの時代に遡る記憶を持っている」とサンドに書き送った 1866 年 9 月 29 日付けの『感情教育』の著者の手紙に応えたものであった⁴⁵⁾。

サンドはまた、フロベールに宛てた手紙の中で「それがあなたの記憶なのですね。もしはっきりと何も思い出せないとしても、永遠の中で蘇った感覚はもっているものです」と続けているが、この言葉からも、プラトンの愛読者であった二人のやり取りがソクラテスの問答やブルーストのマドレーヌの「想起説 *réminiscence*」、さらに身体は滅んでも魂はすべての知を保有し続けるとする「魂の永劫」説に依拠していると推察するに十二分である。サンドとフロベールが、上述したように、相互の往復書簡の交流の場で、「ファラオンの時代に遡る記憶」「永遠の中で蘇る感覚」といった二人の作家同士のみに通じるメタラングのコミュニケーション用語を通し、プラトン哲学について語りあっていたことは注目すべきことと思われる⁴⁶⁾。

ところで、『祝杯』(1865)は、死後の魂が存在することのみに重心が置いて書かれており、魂が複数の個体に宿るとする論までは踏み込んではいない。サンドの創作にメタンプシコーズの輪廻転生説が顕著となってくるのは、翌年以降の前述したルシアンさんが登場する作品においてである。言い換えれば、『祝杯』の想起説を拠り所とする魂の不死論がその後のサンドの輪廻

Amis de George Sand, no.22, 2000, pp.30-39.

44) サンドのフロベール宛ての書簡 (1866 年 6 月 1 日付)。

45) サンド宛てフロベールの書簡 (1866 年 9 月 29 日付)。

46) *Corr.* t. XX, p.136. « Flaubert disait posséder des souvenirs qui remontent aux Pharaons. », Cf. note de Georges Lubin.

転生説の礎になっているとも考えうるのである。このように、『祝杯』においてサンドは、「魂の永劫説」「想起説」を文学創造の根底の支えとし、輪廻転生説を手掛かりに、生きること、死んでゆくことの意味と理想を物語化したと言っても過言ではないと思われる⁴⁷⁾。

エルマンを仲介とし人間の世界を知り始めたズィラは、妖精でありながら「愛とは純粹でなにか力強いもの」だということを理解する。そして、いつの間にかエルマンを愛してしまう。人間の愛を理解できるのは賢い妖精だけゆえに、ズィラの知性が触媒となってズィラの恋は、彼女自身をこれまでとは異なる存在に変容させる。しかし、エルマンが自分を育ててくれたズィラに対して感じるのは、母親に対する肉親愛のみである。彼はズィラの愛を退け、人間の女性ベルタを愛して結婚し、4人の子供をもうける。すると、ズィラは夫婦の子供の一人を強引に養女にして育てようとするが、幼な子はある日、母親恋しさのあまり衰弱し死んでしまう。その夜、夢の中でズィラは、この子供に「来て！」と呼ばれる。そして、ズィラは、妖精の王女のように毒杯を仰ぐ。人間の愛を知り、あの世で自分を必要とする人間エルマンの子との愛に生きるために。

プロットが急展開するこの物語の最終章は、次の一行で終わっている。「エルマンは大きな墓を作り、二人をそこに納めた。夜の間に見えない手がそこにある文言を書いた。「死は希望なり」*La mort, c'est l'espérance* と⁴⁸⁾。

死は希望である。なぜなら、ヒトは死んだのちも、その魂は存在し続け、何らかの他の生命体のなかで生き続けられるからだ。死はあらたな生を獲得

47) 文学史の上では、ブルーストの『失われた時を求めて』にみる紅茶に浸したマドレーヌが誘う記憶の連鎖がプラトンの想起説に関連していることはすでに明らかにされている。ラブレールは、その作品の中で非常に多くプラトンを参照している。人生を通じてプラトンを読み続けた。『ガルガンチュア』ではソクラテスを敬愛している。このようにラブレールはプラトンを頻繁に引用し、ソクラテスもその作品に回帰的に登場している。『パンタグリユエル』の中で、ガルガンチュアは息子にプラトンを真似て、ギリシャ語を学ぶよう薦めている。

48) *La Coupe, ibid.*, P.112.

する希望なのである。

サンドのパートナーのマンソーは死んでゆくが、その魂は永遠に存続する。そして、死後の彼の魂は他の生物に宿る、とする輪廻の思想は、死にゆく者も残された者をも慰める。『祝杯』は、マンソーとサンド自身へのレクイエムとなったと言えよう。

題名の『ラ・クーブ』は、一般に「杯」を意味するが、祝杯も意味し、同時に毒杯の意味をもつ。ソクラテスの弟子のプラトンが「ポリテイア」で理想の国家建設を探求し、アイデア界の存在を説き、アイデア論を展開した哲学者であることは人口に膾炙するところだが、『ラ・クーブ』は、そのプラトンの師匠ソクラテスが仰いだ毒杯を示唆している。しかし、この妖精の物語世界では、死は希望であるがゆえに、『ラ・クーブ』は毒杯ではなく「祝杯」である。杯の祝杯は表裏一体の生と死のメトニミーを表象し、科学と魂が融合する小説『祝杯』は、希望のメトニミーとなっている。

毒杯を仰ぐ哲学王と妖精の王女の死に際を比較すると、そこにはジェンダーの視点から興味深い事実が立ち現れる。

ズイラの涙を前にして決心が鈍ることを恐れた王女は、彼女に「永遠にこの世を去ってゆく前に、地上の美の純粋な発現を見たいから薔薇の花を持ってきて欲しい」と頼んだ。ズイラが戻ってくると、王女は氷河の塊の側に座っていた。頭を無造作に腕の上にもたれさせて。もうひとつの手はだらりとぶらさがり、空の杯は衣服の端に転がっていた。ズイラは彼女が眠っているのだと思った、しかし、その眠り、それは死であった。⁴⁹⁾

惜しまれ嘆き悲しむ多くの弟子たちに囲まれホモソーシャルな磁場で平和に死んでゆく男ソクラテスと故意にズイラを遠ざけ氷河の冷たい氷塊に寄りかかって徹底した孤独と静けさのうちに死を迎える女の構図には、明らかな

49) *Ibid.*, p.106.

差異と対照が認められるのだ。しかも、人類の未来に思いを馳せ、科学の進歩と叡智により進歩する科学を正しく世のために役立てるよう遺言を残してゆく王女は、この死を迎える場面では、カリスマ性と偉大さにおいて男性リーダーに優るとも劣らないと言えるだろう。

VI. おわりに

唯物論か唯心論かをめぐる当時の思想潮流のなかで、サンドの立ち位置は科学主義一辺倒ではなく、ダーウィンの『種の起源』を条件付きで認めつつ、第三の道として輪廻転生説を重要な概念と見なすものであった。サンドは、常に二項対立を拒否し、多様性を志向する作家であったといえる。

ジョルジュ・サンドの多くの作品は、女性が決して男性に劣る「ツーセックス・モデル」でも「第二の性」でもなく、往々にして男性より優れた知性と人間性を有している場合があることを、多様な文学的戦略を駆使し徹底して提示し続けている。病に倒れ死を間近にした伴侶アレクサンドル・マンソーに捧げた『祝杯』は、科学か魂かの二項対立の「出口なし」ではなく、王女とズィラが人間界を、ポニユス先生とエルマンが妖精界を選ぶことにより小説界に均衡をもたらされている。しかし四つの死（王女、ズィラ、ポニユス先生とエルマンの赤ん坊）は、人間界の死である。そこには、魂を尊ぶ人間界に重きをおきながら科学の発展を期待する、つまり、人類の未来を見据えた第三の道を志向する作者の立ち位置が垣間見られる。

アルチューセルによれば、「科学とはその根拠が検証可能であり、確立された理論のもとで同じ観測結果が得られる、反復可能な知識である」。つまり、科学は現象を現象として解明する学問である。他方、哲学は科学を畏敬しつつ規範を考える学問である。サンドは、この科学や哲学という男性的な言説に偏っている思想の領野に「女がない」ことに気づいていた。シクスーが「表徴の世界＝プロープルの世界」と定義し、クリステヴァが「象徴界」と名付けた男性優位の磁場で繰り返し広げられる、魂か科学かという命題に対し、サンドは、フロバールによれば、女でも男でもない「第三の性」の作家として男性知識人が与え得ない、両者を超越する形而上学的な叡智を示唆

し、場合によっては、女は男より優秀な存在であることを明示した。

他方、文学研究は科学の一種だが、創造としての文学は芸術の一種であるとされている。人間の実存を現象として描き、実践的規範を問い、かつ美を通して規範の先の宗教的領域の救済の問題にも取り組む。したがって、文学とは人間を耕すものであるといわれる所以であるが、サンドはこのことを熟知していた作家であったと思われる。

サンドは4才で父親を落馬事故で失い、その結果、経済力のない母親から祖母に「商品」のように身を売られたと認識していた。日夜、呻吟し懊悩して一言一句を産み出したフロベールと異なり、サンドは流れるように容易くものを書くことが出来たと言われているが、だからといって、単になりゆきに任せて物語を編み出していたのではなかった。サンドにとって創作とは、人間がヒトの手からヒトの手へ渡る商品や交換可能な物体ではなく、愛や魂をもつ唯一の自由な存在であることを最確認することであり、書くことこそが自らのアイデンティティに価値を与えうる方法であったと推測される。こうした文脈において、妖精たちが構成する女の世界を描いた『祝杯』は、一種の「エクリチュール・フェミニン」の挑戦と戦いを象徴していると言えるだろう。